



「農の暮らし」(35) 「農は生きる喜び」有機無農薬農園むすび農園



長野県松本市 阪本 瑞恵さん

「むすび農園」第2弾！ 東日本大震災後、農園を茨城県から日本アルプスを一望できる松本に移転しました。大震災、畑の閉鎖、移転を経験し、松本の地で再始動した「むすび農園」。今回は、そんな阪本さんの移転までの迷いや農業に対する情熱、また、「むすび農園」の近況について綴っていただきました。

(第1弾は2009年2月号に掲載)

茨城県で農業研修をして独立し、夫婦で「むすび農園」を始めたのが、約5年前。農を切り口として、よりよい社会作りをしていきたいと、できるだけ多くの人にいろんな形で関わってもらえる農園を目指しています。季節折々の有機無農薬野菜をセットにして宅配しながら、田んぼや大豆のトラストをしたり、都内のイベントに広報活動で出店したりしながら、生業としても少しずつ軌道にのってきました。みんなで一緒に農作業をしてご飯を食べる「縁農(えんのう)」にも年間でのべ300人くらいの方が来てくださるようになりました。もとは農や百姓暮らしにふれてもらう機会をつくりたいと始めた「縁農」ですが、やってみると私たちが得ることの方が多く、たくさんの喜びがありました。茨城県の田舎にある古い

家にながらも、訪れてくれる方が新しい風を次々と我が家に吹き込んでくださる面白さ。一人でする作業も面白いものですが、大勢でワイワイとしゃべったり笑ったりしながらする作業もまた楽しい！ 人と会うことが好きで好きでたまらない夫も人と触れ合う機会が持て(笑)、料理下手な私も「縁農」を通して鍛えられ、今や給食のおばちゃんさんながら大人数の料理もなんなくこなせるようになりました。1年目はまさに髪を振り乱して必死に農作業の毎日でしたが、翌年からは忙しいながらも少しずつ余裕ができて、農園の野菜を使って自然な食のあり方を提案する週末カフェを友人たちとひらいたり、農閑期にはお金や食について考えるイベントを都内で開催したり、忙しいながらもやりたいことが思う存分できる、百姓暮らしの醍醐味を味わっています。



写真：茨城での収穫祭。みんなで大根収穫！

震災から移転まで

3年目の冬に初めての子どもが生まれ、その2ヵ月後に東日本大震災と福島原発事故が起きました。多くの命が失われ、原発事故によりあまりにも広大な大地や水や生き物が汚染されました。山の落ち葉をさらって肥料や腐葉土として使う、里山を生かした伝統的な農業や、地産

池消や一物全体という今まで大切にしてきた価値観さえも時には変えていかねばならない現状に憤りや悲しみを感ずる。我が家ではすぐに野菜の出荷をストップしたものの、さてこれから農園をどうしようと、夫婦でいろいろな道を考えました。大好きな土地を離れたくない、地域でお世話になった方々や有機農家仲間や師匠、縁農に来てくれた人たちと離れたくない。この地に残って、脱原発活動をしていくことが大切なのではないか。とはいえ、家族のように思っている会員さんに自分たちの野菜を出荷する気にもどうしてもなれず、畑にころがして育てようと思っていた娘を土の上でハイハイさせたいという気持ちにもなれない。移転するにしても自分たちだけ移転することへの疑問など、心が揺れ迷う期間がしばらく続きました。けれど、お世話になっていた有機農家さんから「日本中、休耕地がいっぱいあるんだから、移動できる農家は



写真：アルプスを一望できる松本の畑できるだけ移動して安全な野菜を少しでも供給することが大事だよ！」と背中を押していただき、思い切って決断することができました。移転先は長野県松本市。縁もゆかりもない松本でしたが、まるで呼ばれているかのように次々と不思議なご縁が生まれ、すぐに家や畑を貸してくださる方も見つかりました。現在は、松本平の東側に位置する山の中腹に



写真：家族で落ち葉さらいる、中山という地域に暮らしています。松本駅から車で15分という場所ながらも、田園風景がひろがり、遠くにはアルプスの山々が連なる雄大な景色を見ることができます。

畑から離れて感じたこと

農園を再開するまでの約1年間、畑から離れて改めて感じたことがあります。それは「私はもう死ぬまで田畑から離れないぞ〜！」という強い思いでした。田畑で野菜やお米を育てたい。土に触れたい。野菜が日々大きくなっていくのを見たい。「ああ、今年もこの野菜の旬が来たなあー」と野菜にかぶりつきたい。畑でクタクタになるまで働いて、熱いお風呂に入って、今日もよく働いたなあとお布団に入りたい。元気いっぱいの野菜たちを料理したい。豆を収穫したり、選別したり、こまごまとした手仕事をしたい。「私の生きる喜びは、田畑にあるんだ〜！！」と、天に向かって叫びたいような思いが、お腹の底から湧いてきたのです。地球の現状や社会のあり方に疑問を持ち、社会を変えるにはまず自分の生き方から、とはじめた百姓暮らしですが、今や私にとって農は生きる喜びそのものであるんだなあ、と改めて感じました。それは私にとって大きな嬉しい発見でした。

松本で再出発

松本へ来て、安心して落ち葉をさらったり、土ぼこりが舞う中で作業をできることが、いかにありがたいことかを実感しています。娘も口のまわりを土で真っ黒にしなが、畑をハイハイしたり、歩いたり。当たり前で、なんでもないようなことが、今では本当に幸せなことだと感じます。松本の冬は、寒いときはマイナス 16℃にもなるため、茨城と違って通年出荷はできませんが、冬の間に休めるのもまたメリハリがあって良いものです。春には「縁農(えんのう)」も再開し、みんなで建てた育苗ハウスで温床を踏み込み、苗を育てました。そして今年の夏から出荷を再開。1年以上も野菜を待ってくださったご家族に「待ってました」と喜んでもらった時は、ありがたく涙が出ました。現在は田んぼ 1 反と畑 9 反をお借りしています。松本へ来ての大きな変化は、食べてくださる方が近くなったことです。今までは宅配便でお届けしていましたが、今は直接取りに来てくださる方も多く、「さつまいもを子どもが取り合いになって食べてる」「普段野菜をたべてない子どもがパクパク食べた」「にんじんの皮まで安心して



写真: 友人とむすび野菜ピタパンをイベント出店食べて幸せだ」など、顔を合せて聞けることは、とてもとても嬉しく、農作業の大きな原動力になっています。子連れ縁農も増え、子どもたちが畑でさつまいも堀りをしたり、コスモスを髪に飾っ

たり、土いじりをしているのを見るのはなんとも嬉しいものです。出荷作業も近くのお母さんたちにお手伝いに来てもらい、女ばかりで話に花を咲かせながら、にぎやかに出荷しています。



写真: 松本でとれた久々の野菜セット

近い将来は食・農・種に関する学びの会を開いたり、自給したい人を応援するプログラムや、お母さんたちによる種どりチームなど、もっといろいろな人にいろいろな形で関わってもらえる農園にしたいと、日々妄想しています。そして松本でたくさんの人とつながりながら、脱原発運動や、食やエネルギーをはじめとする様々なものの地域内循環・ローカライゼーションなどに関わっていきたいと思っています。そして遠い将来には、生きることに関わっていることなら、なんでもできるおばあちゃんになって、死ぬ直前まで野良仕事をしていたい…というのも、私の夢の 1 つです。その前にまず子どもをたくさん産んで、「生きる力」のある子育てをしてから、でしょうか。なににせよ、楽しみがいっぱいです！

■むすび農園 <http://musubifarm.org/>
〒390-0823 長野県松本市中山 3504-2
電話・ファックス 0263-58-5086
メール musubi@kni.biglobe.ne.jp